

ESSAY
エッセイ

クラシックは面白い —その4

天才といえば、サン＝サーンス

「モーツァルトのあとに、彼に匹敵するような神童・天才は現れなかったのか」。「いないことはない」。「いるとすれば」。「サン＝サーンスだね」。

サン＝サーンスは1835年、パリに生まれた。3歳で早くもピアノの曲を作曲した。10歳でピアニストとしてパリのサル・プレイエルでデビューした。曲目はモーツァルトとベートーヴェンのピアノ協奏曲。満場拍手大喝采。アンコールの声に応じて舞台上に現れたサン＝サーンス坊やの言ったことには、

「皆さん、ボク、ベートーヴェンのピアノ・ソナタなら全部暗譜で弾けるよ。どれでもいいから指名してください。」

少年サン＝サーンスは学業の成績も優秀で幼いうちから古典文学に通じラテン語を読みこなした。長じて音楽家という職業に就き、作曲家として、ピアニストとして、また“フランス国民音楽協会会長”として、多忙な生活の中で欠かさなかったのが、天文学と考古学と哲学の研究だった。(晩年の彼は天体望遠鏡を買ったのが自慢で暇さえあれば夜空を仰いでいた)。

作曲家としてのサン＝サーンスはオペラや交響曲から宗教曲、ダンス音楽に至るあらゆるジャンルの音楽をこなす豊饒の書き手であったが、ただひとつ彼が嫌いだっただのは“難解な音楽”だった。彼の音楽はいつも明快であった。

ピアノとオルガンの演奏に関しては天下無敵で彼の右に出るものはいないと言われる。19世紀の中頃でいえば、その道の天才はフランツ・リストと言われたものだが、そのリストはサン＝サーンスのピアノの腕前に敬服しており、「私よりうまいピアニストがいる。サン＝サーンスだ」と日頃から周囲に漏らしていた。それほど技巧家の彼が最も得意にしたレパートリーがモーツァルトである。当時はモーツァルトといえば子どもの練習用の音楽と考えられており、演奏家はだれもまともに取り上げようとしなかった。ところがサン＝サーンスのモーツァルト演奏を聴いたマルセル・ブルーストは「ピアノの音の純粋な美しさ、演奏の優雅さ、抑制のみごとし」に感歎して一文を草している。天才が天才を知る例といえよう。

サン＝サーンスはまた無類の旅行好きで、イタリア、スペインから南米、アフリカまで旅をした。中でもアルジェリアが好きだったが、1921年その地で客死した。本望であったか。よろずに桁外れな巨人だった。

石井 宏(音楽評論家)

1930年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004年、「反音楽史 さらば、ベートーヴェン」(新潮社)で山本七平賞を受賞。近著に、「ベートーヴェンとベートーヴェン—神話の終り」(七つ森書館)がある。